

短大生の『実習』に関する一研究(2)

幼児教育学科 山田 郭子・角田 道代・今井 靖親

目 的

本研究の目的は、第一に、昨年実施した保育実習に関する調査と同様の質問紙を用いて、今年度は幼稚園実習参加の前・後にアンケート調査を行い、得られた結果について分析と考察を行うことである。

第二に、今年度の幼稚園実習の結果と昨年度実施した保育実習の結果とを比較検討することである。

方 法

1. 幼稚園実習における実習前と実習後の比較

本学幼児教育学科第3部2回生を対象として、幼稚園実習に参加する前と終了後に、昨年度保育実習に関する調査で用いたものと同じ内容のアンケート調査を行い、実習の前後で学生の意識にどのような変化があるかを調べた。

(1) アンケート調査の内容

事前調査：① 実習を前にして、「楽しい（嬉しい）だろうな」と期待していること（9項目より5選択）

② 実習で「学びたい（知りたい）」と希望していること（12項目より5選択）

③ 実習に際して、「心がけ、実行しよう」と思っていること（8項目より4選択）

④ 実習を前にして、「不安に思う（気がかりな）」こと（11項目より5選択）

事後調査：① 実習で「楽しかった（よかった）」こと（9項目より選択制限なし+「その他」自由記述）

② 実習で「学べた」こと（12項目より6選択+「その他」自由記述）

③ 実習で「心がけ、実行できた」こと（8項目より選択制限なし）

④ 実習での「つらかった（できなかった、嫌だった、悲しかった）」こと（11項目より選択制限なし+「その他」自由記述）

(2) 調査対象人数 事前調査：66人 事後調査：62人

(3) 調査実施時期 実習前：平成18年6月 実習後：平成18年7月

2. 幼稚園実習と保育園実習の比較

アンケート調査で得られたデータをもとに、幼稚園実習と保育園実習とは、参加した学生の意識にどのような違いがあるかを比較検討した。

結果と考察

1. 幼稚園における実習前と実習後の比較

アンケートの実施方法・結果の出し方・分析の仕方は、すべて昨年度実施した保育園実習に関する調査と全く同様におこなわれた。

1-A：幼稚園実習を前にして「楽しいだろうな」と期待していること

実習の楽しさとして一般的に予想される項目を9項目用意し、そこから5項目を選択させる、という回答方式を採用した。以下、表1から表8まで、今年実施した幼稚園実習に関する調査結果と、昨年実施した保育園実習とを併記して示した。

表1 実習における「楽しいこと」への期待

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	子どもとの自由遊び	61	92	64	97
②	自分が担当する保育（歌・リズム遊び・制作・お話など）	25	38	16	24
③	子どもと一緒に昼食（給食）・おやつ	56	85	40	61
④	園外保育（遠足・散歩など）への参加	53	80	51	77
⑤	いろいろな行事（誕生会・七夕祭り・運動会など）への参加	56	85	49	74
⑦	先生方や職員の方と人間的な心のふれ合いができること	17	26	26	39
⑧	保護者や地域の人たちとふれ合う機会があること	10	15	8	12
⑨	「通勤」という形で「出勤」し、保育の現場の生活が学べること	17	26	26	39

まず、表1の「幼稚園実数」および「%」の欄を見ると、実習の楽しさへの期待は、項目①が92%と圧倒的に多く、以下、項目③（85%）、項目⑤（85%）、項目④（80%）が高い数値を示している。これに、項目⑥（50%）が続く、これらが上位5つを占めている。これに対して、項目②は全体の38%と少なかった。自分自身が担当する保育を考えると、やはり楽しい期待よりは、不安や自信の無さのほうが先に立つのであろう。項目⑦、項目⑧を見ると、先生方や職員との心のふれ合いや、保護者や地域の人たちとのふれ合いに期待を寄せている者は少ないことがわかる。

1-B：幼稚園実習で楽しかったこと

表2を見ると、実習前に期待したとおり、楽しかったことの最高は、項目①であった（95%）。以下、項目③（63%）、項目④（44%）と続くが、項目⑤は事前の期待度が85%と高かった割には、実際に

「楽しかった」と実感できた者は15%と、非常に少なかった。園の行事は、多大の労力が求められる責任の重い保育の一環であり、単純に「楽しい」だけのものでは決してない。学生たちは実際の保育体験をとおしてこのことを理解し、そのために実習後のアンケートでは、「楽しかった」という単純な受けとめ方が減ったのだと思われる。

また、実習前に項目②が38%であったのに、実習後のアンケートでは、これが29%に減少していることも、事前の期待と実際の体験とでは、「楽しさ」にかなりのズレがあったことを示している。

表2 実習における「楽しかったこと」

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	子どもとの自由遊び	59	95	64	91
②	自分が担当する保育（歌・リズム遊び・制作・お話など）	18	29	30	43
③	子どもと一緒にの昼食（給食）・おやつ	39	63	53	76
④	園外保育（遠足・散歩など）への参加	27	44	43	61
⑤	いろいろな行事（誕生会・七夕祭り・運動会）への参加	9	15	22	31
⑥	子どもの発達や年齢に応じた保育のあり方を具体的に指導してもらえたこと	17	27	39	56
⑦	先生方や職員の方と人間的な心のふれ合いができたこと	12	19	33	47
⑧	保護者や地域の人たちとふれ合う機会があったこと	10	16	20	28
⑨	「通勤」という形で「出勤」し、保育の現場の生活が学べたこと	19	31	35	50

次に、項目⑥を挙げた者は27%と少なく、さらに項目⑦、⑧などでも肯定的にとらえている回答は20%にも達しなかった。これらの低い数値を見ると、大多数の学生たちは、今回の実習の内容や指導に満足していないように思われる。アンケートの結果だけでは、詳細は不明だが、なぜそうだったのかをさらに追究する必要がある。

2-A：幼稚園実習で学びたいこと

表3には、学生が実習をとおして学ぶべき主要なことがらが項目が①から⑫まで列挙されているが、実習に参加する前の段階で、学生たちが強く望んだのは項目⑦（77%）、①（76%）、⑨（73%）で、それぞれ全体の約70%強を占め、これに項目⑪が48%で続いた。

この結果は、実習を前にして、まずは「幼稚園教育の意義」・「子どもたちの園生活の様子」・「子どもたちの発達特性や発達課題」・「具体的な保育のあり方」などを学びたいという希望を強く持っている事実を示している。この点に関しては、養成校側はもちろん、実習園においても、観察実習などを含めた十分な事前指導おこない、実習生のニーズに応えることが必要であると考えられる。

その他では、項目②、③、⑧では30%台、項目④、⑥、⑦、⑩では20%台の回答率があり、最も低かったのは、項目⑫で15%にとどまった。実習をとおして何を学びたいかと、多くの項目を並べられ、問われても、初めての幼稚園実習を前にした学生が、この段階で明確な指摘をするのは困難だったとも考えられる。

アンケートで求めた12項目中6項目という選択制限のために、比較的集中的に選択されたのが、上記の⑦、①、⑨、⑪の4項目だったと解釈できる。

表3 幼稚園実習で学びたいと希望していること

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	幼稚園とはどのようなところか、何をするとところか、体験をとおして理解すること	50	76	31	47
②	幼稚園教諭という資格に相応しいことを学ぶために「実習」という体験が必要なだと自分自身で納得・理解すること	36	24	21	32
③	幼稚園と保育所の同じ点・似ている点・違う点について、実際の体験から理解すること	21	32	28	42
④	実習先の幼稚園の独自性や特色（保育方針・保育内容など）や、公立と私立との違いを具体的に知ること	15	23	18	27
⑤	園により、その規模や地域の特色には、大きな違いがあることを、実際の体験から知ること	19	29	19	29
⑥	園にいる専任の園長・教諭・看護師・栄養士・調理員・事務職員・用務員などの仕事内容や人間関係などについて知ること	18	27	12	18
⑦	子どもたちが登園してから降園するまでの園生活の流れが、実際の保育の形態・内容・方法などに関連づけて理解できること	51	77	39	59
⑧	実習日誌を書く必要性や大切さがわかり、また、その書き方についても具体的な指導をしてもらえること	24	36	29	44
⑨	乳幼児の園生活の実際がわかり、自分がその中で、どのように保育に関わったらよいかを学ぶこと	48	73	52	79
⑩	保育指導計画（指導案）を実際に書くことで、その必要性や書き方が学べること	17	26	16	24
⑪	子どもたちの年齢や心身の発達の特性と、一人ひとりの発達課題に即した指導のあり方を学ぶこと	32	48	39	59
⑫	保育中の事故・けが・突然の災害などの緊急事態に、自分がどのように対処したらよいかを学ぶこと	10	15	25	38

2-B：幼稚園実習で学んだこと

表4で、まず顕著なのが、項目②の数値が事前と比べて30%も大幅に上昇し、上昇率では項目中第一位を占めたことである。項目⑦、⑧、⑪も相対的に上昇が著しい。特に項目⑦は92%の選択率を示した。これらは、まず、学生たちが、保育士の資格を取得するためには、実習というものが大切であることを実感できたことを示している。また、経験をとおして子どもたちの年齢や発達の姿を理解し、日々の生活の流れにふれてみて、保育の内容や方法への理解も深まり、実際の指導のあり方についても学ぶこと

ができたし、実習日誌を毎日書くことの必要性や大切さもわかったという実感が持てたのだと思う。つまり保育実習の意義と必要性への認識を確実に深めた証拠である。大学で彼らの実習指導を担当している教師としては、このように実習の効果が得られたことを素直に喜びたいと思う。

表4 幼稚園実習で学んだこと

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	幼稚園とは、どのようなところか、何をするとところかなど、体験をとおして理解することができた	40	65	30	43
②	幼稚園教諭という資格に相応しいことを学ぶために「実習」という体験が必要なのだと納得できた	41	66	54	77
③	幼稚園と保育所の同じ点・似ている点・違う点について、実際の体験から理解ができた	6	10	21	30
④	実習先の幼稚園の独自性や特色（保育方針・保育内容など）や、公立と私立との違いを具体的に知ることができた	7	11	14	20
⑤	園により、その規模や地域の特色には、大きな違いがあることを、実際の体験から知ることができた	12	19	36	51
⑥	園にいる専任の園長・教諭・看護師・栄養士・調理員・事務職員・用務員などの仕事内容や人間関係などについて理解できた	19	31	21	30
⑦	子どもたちが登園してから降園するまでの園生活の流れが、実際の保育の形態・内容・方法などと関連づけて理解できた	57	92	51	73
⑧	実習日誌を書く必要性や大切さがわかり、また、その書き方についても具体的に学ぶことができた	39	63	29	41
⑨	乳幼児の園生活の実際がわかり、自分がその中で、どのように保育に関わったらよいかを学ぶことができた	45	73	41	59
⑩	保育指導計画（指導案）を実際に書くことで、その必要性や書き方を学べた	19	31	31	22
⑪	子どもたちの年齢や心身の発達の特性と、一人ひとりの発達課題に即した指導のあり方を学ぶことができた	40	65	53	76
⑫	保育中の事故・けが・突然の災害などの緊急事態に、自分がどのように対処したらよいかを学ぶことができた	12	19	20	29

項目④と⑤の下降が目立つが、その他の項目では、大きな増減は見られなかった。

3-A：幼稚園実習に際して、「心がけ、実行しよう」と思っていること

表5の数値は、8項目から5つを選択させた結果である。上位5つを列挙すると、項目③（97%）、項目⑧（76%）、項目①（67%）、項目⑦（56%）、項目④（48%）、の順であった。これに対して表6は、

選択制限なしに回答させた結果である。実習を終了した時点で、学生たちがこれらの項目について努力し、強い達成感を持てたことを示唆している。

表5 実習に際して「心がけ、実行しよう」と思っていること

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	出勤・会合・保育などの時間に遅れない	44	67	25	38
②	実習中は、自分の服装や髪・持ち物などに十分注意する	14	21	16	24
③	しっかりとあいさつをし、言葉づかいに注意する	64	97	60	86
④	体調を崩すと、いろいろな人に迷惑をかけるので、健康管理には、十分に気をつける	32	48	44	67
⑤	出勤簿に印を押す、実習日誌・保育指導計画・課題などを提出するなどの決まりは、しっかり守る	20	30	18	27
⑥	無断で遅刻したり、休んだりしない	10	15	15	15
⑦	積極的な態度で実習に参加し、担当の先生から指導を受ける	37	56	33	50
⑧	笑顔や明るさを保ち、意欲的な態度で子どもたちや先生方とのふれあいを豊かにする	50	76	53	76

3-B：実習で「心がけ、実行できた」こと

表6 実習で「心がけ、実行できた」こと

番号	項目	幼 実数	%	保 実数	%
①	出勤・会合・保育などの時間に遅れない	61	98	65	93
②	実習中は、自分の服装や髪・持ち物などに十分注意する	57	92	63	90
③	しっかりとあいさつをし、言葉づかいに注意する	62	99	57	81
④	体調を崩すと、いろいろな人に迷惑をかけるので、健康管理には、十分に気をつける	61	98	44	63
⑤	出勤簿に印を押す、実習日誌・保育指導計画・課題などを提出するなどの決まりは、しっかり守る	53	86	60	86
⑥	無断で遅刻したり、休んだりしない	57	92	69	99
⑦	積極的な態度で実習に参加し、担当の先生から指導を受ける	39	63	45	64
⑧	笑顔や明るさを保ち、意欲的な態度で子どもたちや先生方とのふれあいを豊かにする	44	71	56	80

4-A：実習を前にして、「不安に思う（気がかりな）」こと

表7 実習を前にして「不安に思う（気がかりな）」こと

番号	項 目	幼 実数	%	保 実数	%
①	遅刻しないように、毎朝早く起床し、しっかり朝食をとって実習に行けるだろうか	10	15	8	12
②	毎日、朝早くから実習園に行き、時には、夜遅く帰るような生活が続くと、疲れがたまって動けなくなるか	16	24	27	41
③	緊張や疲労が重なって体調を崩し、大事な実習を休んでしまうのではないか	20	30	27	41
④	実習生として、毎日、元気に明るくふるまえるか、身体表現など積極的にできるか	43	65	40	61
⑤	園の子どもたちから自分が受け入れてもらえるか	40	61	46	70
⑥	園の先生方やその他の職員の方々から、自分がどのように見られるだろうか	38	58	43	65
⑦	子どもたちの年齢や心身の発達に応じて、どの子にも適切に対応できるだろうか	23	35	39	59
⑧	ピアノを実際の保育の場面でうまく弾けるだろうか	45	68	34	52
⑨	経験が無い自分が、週案や日案などの保育の指導計画案をきちんと作成できるだろうか	42	64	37	56
⑩	毎日提出する「保育記録」がきちんと書けるだろうか	40	61	16	24
⑪	保育記録その他の提出物を決められた期限内にきちんと書いて出せるだろうか	13	20	13	20

表7は11項目の中から5つを選択させた結果である。選択率に高かった順に5つの項目を挙げると、⑧、④、⑨、⑤、⑩で、いずれも60%台を示している。それに項目⑥が続いている。これら以外の項目は、それほど高い数値とは言えず、最低が項目①の15%で、高くても項目⑦の35%である。

実習を前にして、未経験な自分が、実際の保育にどんな態度・技能・心構えで臨んだらよいかかわからずに、不安や戸惑いを感じ、自信が持てないでいる学生たちの心の状態が強く伝わってくる。

事前の授業やアンケート調査などで、実習に行く学生たちの精神状態や準備状況を確実に把握しておき、適切な指導をおこなうことが必要である。

4-B：実習での「つらかった」こと

表8からわかるように、実習を終わった時点では、項目②以外は、殆どすべての項目で数値が大幅に減少している。実習前の学生たちの不安や心配が極めて高かったので、指導に当たる私たちが気がかりではあったが、実習後の調査結果を見て、内心ほっとした。

表8 実習での「つらかった（できなかった・いやだった・悲しかった）こと

番号	項 目	幼 実数	%	保 実数	%
①	遅刻しないように、毎朝早く起床し、しっかり朝食をとって実習に行けない日があったこと	9	15	7	10
②	毎日、朝早くから実習園に行き、時には、夜遅く帰るような生活が続き、疲れがたまってしまったこと	32	35	29	41
③	緊張や疲労が重なって体調を崩し、大事な実習を休まなければならなかったこと	4	4	5	7
④	実習中、元気に明るくふるまえなかったり、身体表現など積極的にできない時があったこと	22	24	17	24
⑤	子どもたちから、自分が受け入れてもらえない感じがあったこと	17	27	4	6
⑥	先生方やその他の職員の方々と、どこか、なじめない感じがあったこと	32	52	20	29
⑦	子どもたちの年齢・体・心の発達に応じた、適切な対応ができなかったこと	19	31	23	33
⑧	実際の保育の場面でピアノをうまく弾けなかったこと	1	2	21	30
⑨	経験がないために、週案や日案などの保育の指導計画案をきちんと作成できなかったこと	15	24	20	29
⑩	毎日提出する「保育記録」がきちんと書けなかったこと	2	3	6	9
⑪	保育記録その他の提出物を決められた期限内にきちんと書いて出せなかったこと	2	3	9	13

実際に保育の場に臨んでみたら、想像していた以上に、学生たちの事前の不安は解消された、あるいは心配したほどではなかった、という結果を示しているを受けとめてよいと思う。

しかし、喜んでばかりはいられない。個々の項目と数値によっては見逃せない問題点がいくつかある。事前調査では、項目⑥「園の先生方や職員の方々から、自分がどのように見られるだろうか」という不安が58%と、比較的高かったが、事後調査では、項目⑥「先生方や職員の方々、どこか、なじめない感じがあった」という回答が52%で最も多かった。これと関連して、項目⑦の「子どもたちへの適切な対応ができなかったこと」や、項目⑤の「子どもたちから自分が受け入れられない感じがあったこと」を「辛かった」と訴えている学生が、全体の約30%を占めていた。

実習では、園の子どもたちや、教職員と心とむ関わりの中で学ぶことが最も望ましいことであるが、今回の実習生たちは、園における人間関係に溶け込めない気持ちがあり、自分自身でも、適切な対応ができなかったことが最も辛い体験だったと受けとめている。

唯一、事後調査の回答で増加を示した項目②は、実習中の学生たちの疲労感が強かったことを示している。緊張や疲労が重なって体調を崩し、実習を休んでしまった者が4人、実習に遅れないように朝食

も摂らずに出かけた者が9人いる。これらは、今回の実習生が、通常は所属する会社で労働しながら午前または午後の授業に出席するという特殊な通学状況が続けている本学幼児教育学科第3部の学生であることと関係があると考えられる。彼らは、教育実習中も、会社に帰ってから労働を続けていた。それゆえ、実習記録などを書く時間も少ないし、若いとはいえ、日々疲労がたまっていく期間での実習なのである。アンケート結果の数値からも、この点に十分配慮する必要がある。

調査結果全体から見て、たとえ少数ではあっても、それらの学生一人ひとりにきめ細かい対応をしていくことが、実習事後指導における大切なポイントの一つであると考えている。

2. 学生の意識から捉えた幼稚園実習と保育実習の比較

昨年度は、保育実習の前後に、今年度は幼稚園実習の前後に、参加学生の実習に関する意識を知るために、アンケート調査を行った。ここでは、その結果をもとに、幼稚園実習と保育実習とでは、学生の意識にどのような共通性あるいは相違があるかを明らかにする。

比較に用いたデータは、既に表1から表8までに掲げた幼稚園、保育所それぞれの「回答率」であった。

そのうち、①同一の項目で、幼・保の回答率の間に20%以上の差があったものを「差あり」とみなし、②各項目の「回答率」が60%以上の場合は「高」、同じく20%以下の場合は「低」とみなして、比較検討の基準にした。

1-A：実習前に期待した「楽しいこと」

- (1) 幼稚園と保育所の回答率で、相互に20%以上差のある項目はなかった。これにより、実習を前に「期待する楽しい内容」については、幼・保でほぼ共通していると判断した。
- (2) 項目①、③、④、⑤が幼・保ともに高かった。これにより、「実習に期待する楽しい内容」としては、「子どもとの遊び・食事・園外保育や行事への参加」が特に高率を占めていることがわかった。
- (3) 幼・保とも、項目⑧の「保護者や地域の人たちとのふれ合い」を期待した者は最も少なかった。

1-B：実習における「楽しかったこと」

- (1) 項目⑥、⑦は、幼稚園実習における回答率が低く、幼・保の間に顕著な差があった。これらの項目は「楽しかったか否か」を問うよりも、「よかったか否か」あるいは「満足できたか否か」と尋ねたほうがより適切だったとも考えるが、なぜ、このような結果が出たのかを知るためには、特に幼稚園実習について、参加者からもっと詳しい報告や説明を得る必要がある。
- (2) 項目①、③、④が他の項目と比べて、幼・保ともに高かった。これは、実習前の期待どおりに、「子どもとの遊び・食事・園外保育への参加」が楽しいことだったことを示している。これに対して、項目⑤では、実習前と比べて大幅に数値が下がったのは、短い実習期間中に、それほど多くの行事を経験しなかったことも影響しているかもしれない。また、既に昨年の報告でも指摘したように、「園内での行事」は、実施面でも多大の労力が求められるうえに、責任の重い保育の一環であって、決して「楽しい」だけのものではない。実習をとおして、むしろ学生たちがこのことを学んだ事実を示す

結果なのではなからうか。

- (3) 項目⑧を「楽しかったこと」にあげた実習生は、幼・保とも最も少なかった。

2-A：実習で学びたいこと

- (1) 幼稚園と保育園の回答率で、両者に20%以上の差がある項目はなかった。これにより、実習で学びたいと希望している内容については、幼・保でほぼ共通していると判断した。
- (2) 項目①、⑦、⑨、⑪が幼・保ともに多かった。これにより、学生が実習で「学びたい」と希望している内容としては、「幼稚園や保育所の役割・子どもたちの園生活の流れと保育との関連性・乳幼児の園生活と自分自身の保育への関わり方・子どもたちの心身の発達課題に即した指導のあり方」などが主要なものであることがわかった。
- (3) 幼稚園実習では、項目⑫の選択が最も少なく、保育実習とは大きな差があった。また、幼稚園実習では項目⑥が、保育実習と大差はないものの、項目全体の中では選択が最も少なかった。

2-B：実習で学んだこと

- (1) 実習で学んだことでは、項目①、⑤、⑥、⑧において幼・保の間で大きな差があった。このうち項目①と⑧では幼稚園実習での評価が高く、項目⑤と⑥では保育実習が高かった。これは、実習前には「学びたいこと」が幼・保で共通していたのに、実際に経験した実習で「学べたこと」の内容は、幼稚園と保育所とは必ずしも同じではないことを示している。
- (2) 項目②、⑦、⑨、⑪では、幼・保ともに多かった。これにより、多くの学生が「実習をとおして学んだこと」は、「資格取得のための実習の必要性・子どもたちの園生活の流れと関連づけた保育の形態、内容、方法の理解・自分自身の保育への関わり方・子どもたちの発達課題に即した指導のあり方」などがともに主要なものであることがわかった。
- (3) 項目③、④、⑩、⑫は幼・保ともに選択が少なかった。これらは、事前の調査でも、「学びたいこと」として多くは選ばれていない。実際に、実習で学ぶべきこととしては副次的なものでもあるから、妥当な結果と言えるだろう。

3-A：実習に際して「心がけ、実行しようと思っていること」

- (1) 幼稚園実習と保育実習では、すべての項目で大きな差はなかった。
- (2) 8項目中、数値の多いほうから5位までの項目を選んでみたところ、項目①、③、④、⑦、⑧が幼・保ともに5位以内に入っていた。
- (3) 項目②、⑤、⑥は、上記の項目と比較して選択数は少なかった。「実習中は服装や持ち物に注意する・出勤簿へ捺印する・実習日誌などを提出する・遅刻や欠席をしない」などは、事前に十分に指導を受けていることでもあり、上記の5項目のほうがより重要だと意識されたのだと思われる。

3-B：実習で「心がけた（実行できた）こと」

- (1) 幼・保とも、すべての項目で、低くても60%以上、高いところでは98%の数値が得られている。

- (2) 3-Aの(2)で示した項目①、③、④、⑦、⑧はもちろん、3-Aの(3)で指摘した項目②、⑤、⑥においても、極めて高い数値が示されている。
- (3) 項目④においては、幼稚園実習では98%であるのに、保育実習では63%と顕著な差が認められた。これは、保育実習では、実習生自身の健康管理面に問題があったことを示している。

4-A：実習を前にして「不安に思う（気がかりな）こと」

- (1) 幼・保それぞれの実習を前にして、学生たちの不安に思うこと、気がかりなことについて調べたところ、項目⑦と⑩で両者の間に大きな差が認められた。

まず項目⑦では、「子どもたちの年齢や心身の発達に応じた適切な対応ができるだろうか」という点において、幼稚園実習では、不安や懸念を示した者が35%だったのに対して、保育実習では59%だった。これは、実習の対象である「子どもたち」が、幼稚園では、ほとんどが4歳児から6歳児までの幼児であるのに対して、保育所では、0歳児から6歳児と年齢幅の広い乳幼児である。それだけに年齢や発達からくる個人差も大きい。そういう年齢幅や発達差の大きい子どもたちに接した経験の無い者が、果たして適切に対応できるだろうかという不安や懸念が強いのも当然と思われる。

次に項目⑩では、「毎日提出する保育記録がきちんと書けるかどうか」という点において、幼稚園実習では不安や懸念を示した者が61%と高かったのに対して、保育実習では24%だった。アンケート調査の結果だけからは、なぜこのような差が生じたのかについて説明ができないが、大学における実習事後指導などの機会に具体的な理由を明らかにする必要がある。

- (2) 幼・保ともに数値の高かったものは、項目④、⑤、⑥、⑧、⑨であった。これは、実習を控えた学生の不安に思うことや気がかりなことは、「保育の場で自分が明るく積極的に動けるか・子どもたちから受け入れてもらえるか・教職員からどのように見られるか・ピアノがうまく弾けるか・週案や日案などの指導計画が書けるか」などに集中していることを示している。
- (3) 項目①と⑪は、幼・保とも低い数値だった。「朝早く起床し、遅刻しないように出かけられるか」や「決められた提出物を期限内に出せるか」などは、大学への通学や授業の中でもやっていることなので、実習だからといって特別に心配することではない、と思われたのだろう。

4-B：実習での辛かったこと

- (1) 幼・保で顕著な差異が認められたのは、項目⑤、⑥、⑧だった。項目⑤と⑥の結果からわかるように、保育実習と比較してみると、幼稚園実習においては、かなり多くの実習生が、自分と子ども、あるいは自分と教職員の間の人間関係がうまくいかなかった、なじめなかった、との感じを持っているようである。

項目⑧では保育実習では30%であったが、幼稚園実習では僅かに一人だけという極端な差があった。実習前には「保育の場でピアノをうまく弾けるだろうか」ということに不安を示していた学生が、全体の68%を占めていたのに、それは杞憂に終わったのだろうか。この点については、今年の幼稚園実習では、実習生が保育の中でピアノを弾くような機会が殆どなかったので、ピアノで辛い思いをしないうで済んだ、というのが実情のようである。

- (2) 幼・保ともに30%を超えていたのは、項目②、⑥、⑦の3項目だった。それに次いで、ともに20%だったのが項目④と⑨だった。これらをまとめてみると、実習で「辛かったこと」としては、①疲労がたまったこと、②教職員となじめなかったこと、③子どもの発達に応じた対応ができなかったこと、④明るく積極的にふるまえなかったこと、⑤指導計画がうまく作成できなかったことなどが挙げられる。
- (3) 幼・保とも、項目①、③、⑩、⑪については、ともに10%以下か、多くても15%どまりであった。「実習に遅れないように出かけられなかった」、「緊張や疲労が重なって実習を欠席してしまった」、「毎日の保育記録が書けなかった」、「種々の提出物を期限内に書けなかった」などで辛い思いをした者は、せいぜい10%前後しかいなかったと言えるが、実習生を指導する立場で考えるならば、たとえ少数であっても、実習で辛い思いをして帰ってきた学生に対するきめ細かなフォローが是非必要である。そこにこそ、こうした実習に関する調査を行う意義があると私たちは考えている。

結 論

- (1) 実習前におこなったアンケート調査では、①「想像し、期待している楽しいことは何か」、②「実習で学びたいと希望していることは何か」、③「実習で実行しようとして心にかけていることは何か」、④「実習に対してどんな不安や懸念を抱いているか」について用意した選択肢から回答を求めた。その結果、幼稚園実習においても保育実習においても、1、2の例外を除いて、上位でも、下位でも共通した項目が選ばれていた。このことから、実習前の段階では、実習先が幼稚園であっても、保育所であっても、実習に対する学生の意識には大きな差はないと考えてよい。
- (2) しかし、実習が終了した後でおこなったアンケート調査で、①「実習で楽しかったことは何か」、②「実習で学べたことは何か」、③「実習で実行できたことは何か」、④「実習で辛かったことは何か」について回答を求めたところ、幼稚園実習と保育実習とで、上位でも、下位でも、共通した項目が多く選ばれてはいたが、両者で数値に大差の認められた項目もあった。
- 幼稚園や保育所の経験を持たない学生たちは、事前には「実習」というものを想像やイメージでとらえるしかない。だから、実習前におこなったアンケート調査の回答は、いわばバーチャル（非現実）な、あるいは各自の想像で捉えた「実習」をもとにした、自分たちの「期待」や「希望」であり、「決意」や「不安」であった。当然、そこには幼稚園実習と保育実習との大きな差異もありえないし、項目の選択にも幼・保同様な傾向が顕著に現れたのだと考えられる。
- しかし、実際に幼稚園や保育所で体験した実習では、事前に想像していたとおりのこともあったし、事前の想像を超えたものや予想もつかないできごともあったと思われる。だから、実習後に行われたアンケート調査の回答に、幼稚園実習と保育所実習での体験の差が生じたり、同様の選択肢にもかかわらず、事前と事後で大きな変動が見られたりしたのだと解釈している。
- (3) 幼稚園実習と保育実習とでは、目的・内容・方法などにおいて類似点、共通点が極めて多い。しかし、両者の教育効果や参加学生の意識の相違などを検証する場合には、実習の時期・参加する学生の

学年・大学における実習指導の内容や方法・アンケート調査の実施時期など、さまざまな要因との関連性も考慮に入れて分析をおこなうことが重要である。

- (4) 本文でも指摘したが、2年間にわたる本研究の調査や検討結果をもとに、現在本学でおこなっている実習指導全般の内容や方法を見直し、そこにどのような問題や課題があるかを探り、今後のよりよい指導や実践に役立てることが必要である。この点に関しては、来年度の研究紀要において、「本学における実習指導の現状と課題」と題して研究を発表する予定である。